

昭和39年12月20日発行(毎月1回20日発行)
物性研究 第3巻第3号

vol. 3 no. 3

物性研究

1964 | 12

1. 本誌は、物性物理の研究を共同で促進するため、研究者がその研究意見を自由に発表し討論しあい、また、研究に関連した情報を速やかに交換しあうことを目的として、毎月1回編集・刊行されます。掲載内容は、研究論文、研究会・国際会議などの報告、講義ノート、研究に関連した諸問題についての意見、情報などです。
2. 本誌に掲載される論文については、原則として審査は行ないません。但し、編集者が本誌に掲載することを著しく不相当と認めたものについては、改訂を求め、または掲載を拒絶することがあります。
3. 本誌の掲載論文を他の学術雑誌に引用するときは、著者の承諾を得た上で private communication 扱いにして下さい。

投稿規定

1. 雑誌のページ数を節約するため、原稿は極力簡潔にお書き下さい。
 2. 原稿は400字詰原稿用紙を使用して下さい。
 3. 数式・記号の書き方は、Progress, Journal の投稿規定に準じ、ミスプリントが生じないように適当な処置をとって下さい。
 4. 図の縮尺はいたしません。図は不必要に大きくせず、それぞれ適当な大きさに画いて下さい。
- 別刷が入用な場合は、投稿の際に所要部数を10部単位で申込んで下さい。別刷代は下記の方式により現金で前納していただきます。

P : 400字詰原稿用紙による頁数

X : 別刷所要部数

別刷代=0.6XP円

購読規定

1. 本誌は「物性研究購読会」の会員にのみ配布します。
2. 「購読会」の会員には個人会員、機関会員の別があります。会費を個人が支払うばあいを個人会員とし、機関が支払うばあいを機関会員とします。
3. 個人会員には入会の際、入会金 100円を納めていただきます。退会の際には入会金はお返ししません。機関会員は入会金を要しません。
4. 会費は月額、個人会員 160円、機関会員 300円とします。
5. 会費は前月中に前納していただきます。会費が前納されなかったときは雑誌の発送を停止し、会費を2ヶ月以上滞納した会員は退会したものとみなします。

1. 本誌は、物性物理の研究を共同で促進するため、研究者がその研究意見を自由に発表し討論しあい、また、研究に関連した情報を速やかに交換しあうことを目的として、毎月1回編集・刊行されます。掲載内容は、研究論文、研究会・国際会議などの報告、講義ノート、研究に関連した諸問題についての意見、情報などです。
2. 本誌に掲載される論文については、原則として審査は行ないません。但し、編集者が本誌に掲載することを著しく不相当と認めたものについては、改訂を求め、または掲載を拒絶することがあります。
3. 本誌の掲載論文を他の学術雑誌に引用するときは、著者の承諾を得た上で private communication 扱いにして下さい。

投稿規定

1. 雑誌のページ数を節約するため、原稿は極力簡潔にお書き下さい。
 2. 原稿は400字詰原稿用紙を使用して下さい。
 3. 数式・記号の書き方は、Progress, Journal の投稿規定に準じ、ミスプリントが生じないように適当な処置をとって下さい。
 4. 図の縮尺はいたしません。図は不必要に大きくせず、それぞれ適当な大きさに画いて下さい。
- 別刷が入用な場合は、投稿の際に所要部数を10部単位で申込んで下さい。別刷代は下記の方式により現金で前納していただきます。

P : 400字詰原稿用紙による頁数

X : 別刷所要部数

別刷代=0.6XP円

購読規定

1. 本誌は「物性研究購読会」の会員にのみ配布します。
2. 「購読会」の会員には個人会員、機関会員の別があります。会費を個人が支払うばあいを個人会員とし、機関が支払うばあいを機関会員とします。
3. 個人会員には入会の際、入会金 100円を納めていただきます。退会の際には入会金はお返ししません。機関会員は入会金を要しません。
4. 会費は月額、個人会員 160円、機関会員 300円とします。
5. 会費は前月中に前納していただきます。会費が前納されなかったときは雑誌の発送を停止し、会費を2ヶ月以上滞納した会員は退会したものとみなします。

1. 本誌は、物性物理の研究を共同で促進するため、研究者がその研究意見を自由に発表し討論しあい、また、研究に関連した情報を速やかに交換しあうことを目的として、毎月1回編集・刊行されます。掲載内容は、研究論文、研究会・国際会議などの報告、講義ノート、研究に関連した諸問題についての意見、情報などです。
2. 本誌に掲載される論文については、原則として審査は行ないません。但し、編集者が本誌に掲載することを著しく不相当と認めたものについては、改訂を求め、または掲載を拒絶することがあります。
3. 本誌の掲載論文を他の学術雑誌に引用するときは、著者の承諾を得た上で private communication 扱いにして下さい。

投稿規定

1. 雑誌のページ数を節約するため、原稿は極力簡潔にお書き下さい。
 2. 原稿は400字詰原稿用紙を使用して下さい。
 3. 数式・記号の書き方は、Progress, Journal の投稿規定に準じ、ミスプリントが生じないように適当な処置をとって下さい。
 4. 図の縮尺はいたしません。図は不必要に大きくせず、それぞれ適当な大きさに画いて下さい。
- 別刷が入用な場合は、投稿の際に所要部数を10部単位で申込んで下さい。別刷代は下記の方式により現金で前納していただきます。

P : 400字詰原稿用紙による頁数

X : 別刷所要部数

別刷代=0.6XP円

購読規定

1. 本誌は「物性研究購読会」の会員にのみ配布します。
2. 「購読会」の会員には個人会員、機関会員の別があります。会費を個人が支払うばあいを個人会員とし、機関が支払うばあいを機関会員とします。
3. 個人会員には入会の際、入会金 100円を納めていただきます。退会の際には入会金はお返ししません。機関会員は入会金を要しません。
4. 会費は月額、個人会員 160円、機関会員 300円とします。
5. 会費は前月中に前納していただきます。会費が前納されなかったときは雑誌の発送を停止し、会費を2ヶ月以上滞納した会員は退会したものとみなします。

ニュース

柏村 昌平氏 8月名大理物理教室へ着任された。

安達 健五氏 11月名大工鉄鋼学科へ着任された。

伊豆山健夫氏 MITより帰国され東大教養部助教授になられた。

A. Abragam 博士 (Saeley) が来日され、次の演題で各地で講演された。

* Dynamic Polarization of Nuclei

* Some Studies on Semiconductors and
Metals in Magnetic Resonance

戸谷 富夫氏 12月10日より1月4日までBombayにおける中性子散乱
国際会議に出席のためインドに出張

プレプリント案内

The Boltzmann equation in a phonon system

C. Horie & J. A. Krumhansl [東大]

Local Mode Frequency due to Light Substitutional Impurities
in Alkali Halide Crystals

: Application to the U-center R. Fiesch,

G. F. Nardelli & N. Terzi [北大]

会議報告

基研研究部委員会 11月4, 5日

特に研究体制について物理科学研究機構, 物理研究会議, 素粒子研, 政府
行政調査会, 学術奨励審議会, 欠員不補充の強化 等について報告討論
が行われた。

基研運営委員会 11月6日

ニュース

柏村 昌平氏 8月名大理物理教室へ着任された。

安達 健五氏 11月名大工鉄鋼学科へ着任された。

伊豆山健夫氏 MITより帰国され東大教養部助教授になられた。

A. Abragam 博士 (Saeley) が来日され、次の演題で各地で講演された。

* Dynamic Polarization of Nuclei

* Some Studies on Semiconductors and
Metals in Magnetic Resonance

戸谷 富夫氏 12月10日より1月4日までBombayにおける中性子散乱
国際会議に出席のためインドに出張

プレプリント案内

The Boltzmann equation in a phonon system

C. Horie & J. A. Krumhansl [東大]

Local Mode Frequency due to Light Substitutional Impurities
in Alkali Halide Crystals

: Application to the U-center R. Fiesch,

G. F. Nardelli & N. Terzi [北大]

会議報告

基研研究部委員会 11月4, 5日

特に研究体制について物理科学研究機構, 物理研究会議, 素粒子研, 政府
行政調査会, 学術奨励審議会, 欠員不補充の強化 等について報告討論
が行われた。

基研運営委員会 11月6日

ニュース

柏村 昌平氏 8月名大理物理教室へ着任された。

安達 健五氏 11月名大工鉄鋼学科へ着任された。

伊豆山健夫氏 MITより帰国され東大教養部助教授になられた。

A. Abragam 博士 (Saeley) が来日され、次の演題で各地で講演された。

* Dynamic Polarization of Nuclei

* Some Studies on Semiconductors and
Metals in Magnetic Resonance

戸谷 富夫氏 12月10日より1月4日までBombayにおける中性子散乱
国際会議に出席のためインドに出張

プレプリント案内

The Boltzmann equation in a phonon system

C. Horie & J. A. Krumhansl [東大]

Local Mode Frequency due to Light Substitutional Impurities
in Alkali Halide Crystals

: Application to the U-center R. Fiesch,

G. F. Nardelli & N. Terzi [北大]

会議報告

基研研究部委員会 11月4, 5日

特に研究体制について物理科学研究機構, 物理研究会議, 素粒子研, 政府
行政調査会, 学術奨励審議会, 欠員不補充の強化 等について報告討論
が行われた。

基研運営委員会 11月6日

会議報告

物性小委員会

11月15日 東大理学部会議室

1° 委員長辞任，改選

宮原委員長より多忙につき辞任したい旨申出があり、結局了承された。

改選の結果、久保 亮五 氏が選出された。

2° 統計力学国際会議

1968年に日本で開く事を了承。物研連でも了承済み。

3° 低温国際会議

1970年に日本で開けるよう学術会議等事務的な準備を行う事を了承。

多様な部門を含み巨大化しているので、内容等については研究者間で討論が必要であるという意見が多い。開催については改めて考える。

4° 学術会議総会報告（宮原氏）

(a)日本で開く国際会議の年2つという枠が、小規模会議について緩和された。

(b)海外国際会議出席の枠について報告があつた。

(c)大学院に関する勧告を行う事になつた。

○ 定員，施設等の設置基準を設ける。

○ 学生の奨励金を全員に。M.C.は貸与，D.C.は助手並を給費。

5° 物性科学研究院と物性研将来計画に関する討議

結論持越し。主な意見は下記の通り。

(a)素研の独走は困る。各大学の level up を同時に進めなければならぬ。

(b)物性研究会議を含みうる体制でなくてはならぬ。

(c)過渡期として、流動研究装置（Compact and portable の機器）制度を作つてはどうか。

（文責 中山）

物性科学研究院について

田 中 一 (北大理)

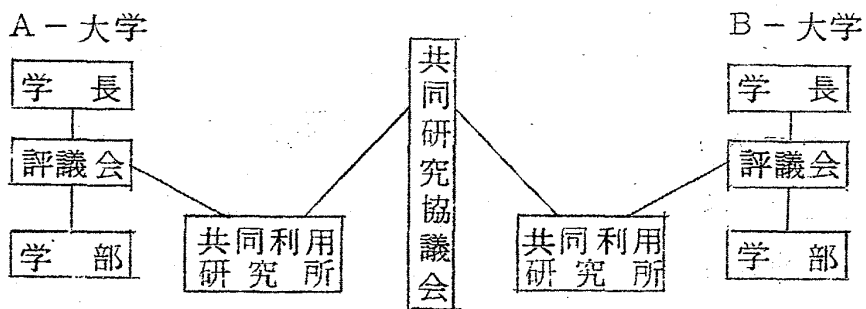
共同研究協議会から物理科学研究院へ

前回の研究部員会の席上「共同研究協議会」が提案された。これは物理の将来計画を実現していくに必要な研究体制として提案されたものである。

この「必要な研究体制」とは、たとえば原子核研究に必要な加速器又は物性の基礎的総合的研究に必要な設備の設置に応じた共同利用研究所のようなものである。

$$\boxed{\text{物性の基礎的総合的研究に必要な設備}} : \boxed{\text{共同利用研究所}} = \boxed{\text{物理将来計画}} : ?$$

共同研究協議会はこの比例方程式の一つの解であつて、次の図式の示すところである。



すなわち共同利用研単独では難かしい研究が行うことができるよう、一つの共同利用研が暴走しないように働くもので、どれか一つの既成の共同利用研に寄生するという案であつた。寄生先として基研がえがかれていた。この案は、7月名大で開かれた研究体制シンポジウムで検討された結果、適当でないと言われ、これに代る高木案物理科学研究院がよりよい案と考えられ、関係委員会で検討されることになった。

共同研究協議会が適当でないと言われた主な理由は、物性研究者の多数の要望である物性研究会議を包み得ないことと、寄生先の用意が充分でなかつたた

ひろば
めである。

研究体制のみたすべき条件

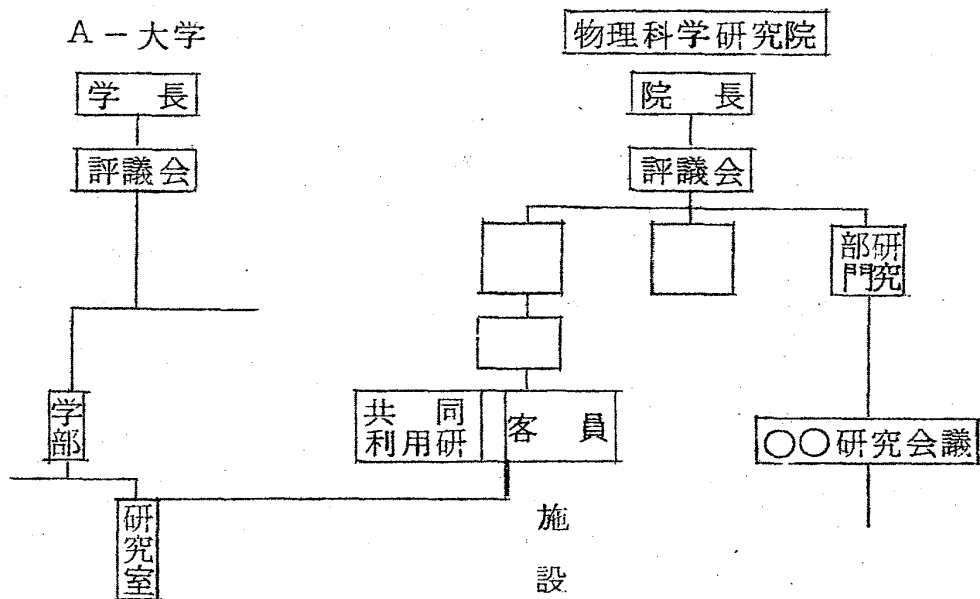
1. 学問の自由，研究者の身分と自主性が保障されること。方法として大学の自治を拠り所とする。公務員特例法の適用を考慮するのもそのためである。
2. 研究体制のもろもろの機関が、全国研究者の意見によつて自主的に運営される。
3. 特定部門の独走をさげ、基礎科学全体の発展がはかられること。

例えば素研の建設に於いては、1の条件を満す為には、大学附置が適當であると思われる。他方2の条件を満たす上ではさし障りがないかどうか。又素研自身の独走と高エネルギー部門の独走を紹くおそれがないかどうか、等いくつかの検討すべき点があげられる。

物理科学研究院とは

上の条件を満しながら、物性研究の研究体制として提出された物性研究会議を包含しうる一案であつて、名古屋大学での体制シンポジウムの席上高木先生によつて提案された。

機 構 図



説 明

研究院は、物性研究会議や素研など新設共同利用研を包含する。が既成の

共同利用研が直ちに研究院に包含されることは求めない。

共同利用研が院に設けられたとしても、研究所は研究者の定員をもたない。院長など一部管理職を除けば、固有定数は技術者，事務関係者に限られる。一方施設と予算は研究員が持っている。この様に、人と物とをわけ、人は大学に、物は研究院にという方式をとることによつて、条件1，2，3を満たそうとするのが、研究院案である。

研究者はいずれも大学に籍を置いたまま、客員としてある期間院で研究するか、又は出向して院の専従的研究者として相当期間素研などの建設やそこでの研究に従事する。このことがスムーズに行われる為には、大学自身も脱皮しなければならない。

名古屋での体制シンポジウム以後

名古屋での体制シンポジウムでは、高木案に賛成する声が強かつた。その後の体制小委員会で、高木案即ち研究院案を将来計画を担う研究体制に関する体制小委の案として認め、これを核特委に提出、核特委はこの案を核特委の案として扱うことに決め、以後関連諸委員会で検討中である。

これらの討論の過程で、特に次の諸点が問題になつた。

- 1) 素研の建設と定常的な運営のためには、固有の研究者定員が必要ではないか。
- 2) 素研の建設期と定常時とに於ける人事問題の適切な処理が可能であるためには、大学その他既存の研究機関は何をしなければならないか。出向していく研究者の大学に於ける扱いはどうなるべきか。

これらの問題点については各方面で検討中である。従つてオーソライズされた案はまだ出来ていない。以下資料の附録として、藤本，高木，田中によつて討論された内容を略記しておく。

附 録

物性研究会議のような形の組織は、スムーズに研究院に包含されるので、ここでは主として、素研にまつわる問題をあげることにする。

§ 1 定 義

- 1) 専任 研究院に専任ポストのある人

ひろば

- a) 専任管理職 院全体の長1名 b) 専任技術者 研究職となり教育職とは
ならない。 c) 専任事務者 その他 行政職とする。
- ii) 研究院で建設，研究等の仕事をする研究員はすべて大学など他機関にポ
ストをもっている。
- iii) 専従研究員 一定期間大学その他の本職から完全に離れて院の仕事に専
心する人
- 客員研究員 大学の仕事から完全に離れることは要求されない場合の
研究員

§ 2 専任を置く場合，置かない場合の問題点

おく場合

- a) 素研の建設が終つて定常的な運営に移るとき、人員の再組織，人事の交
流がスムーズに行くかどうか。
- b) 大学の高エネルギー講座の充実と素研の建設が相まつて進むかどうか。
- c) 素研内の人事の新陳代謝がうまくいくか。
- d) 現在の第2部の仕事がマシンの建設にならんで進めることができるかど
うか。

おかない場合

- a) 大学内及び大学間の準備が整つて、専従及び客員研究員を適切に送るこ
とができるかどうか。
- b) 1つの研究所として統一した運営が可能か。

§ 3 大学と素研との人事処理に関する関係

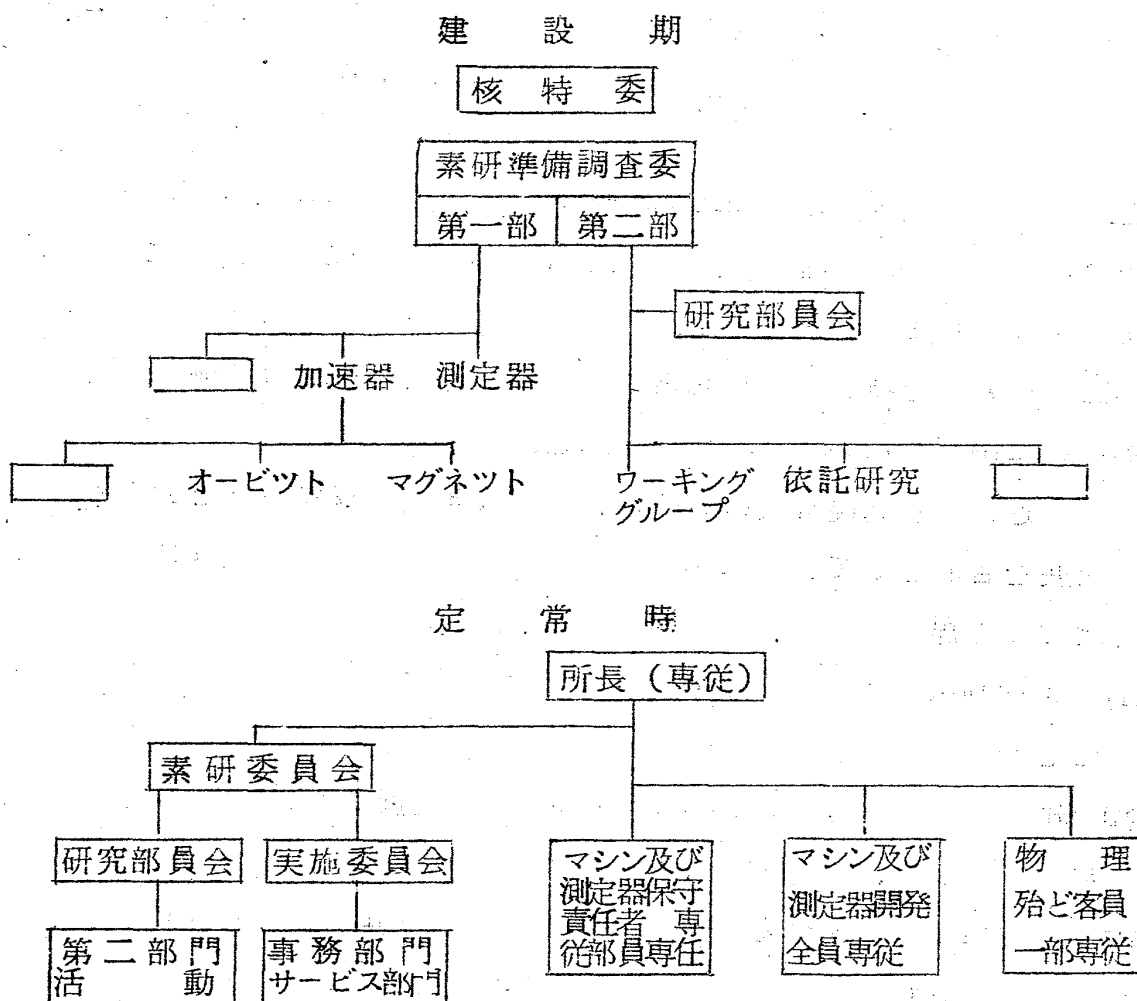
大学からは素研に研究員を送ることができ且つ大学の高エネルギー講座も
充実しうるためには、大学の物理関係のポストが増加しなければならない。そ
れには次の二通りの方法がある。

- i) A大学のX氏に素研の専従者をお願いすることになれば、A大学に年限
つき客員部門のポストをおく。X氏がA大学の身分をもちながら素研の専
従者になる。このポストが期限付であるため、全国での総数は ∞ に発散し
ていくことはない。

各大学にはこのポストを利用して自転車方式をとることができるように
なる。

- ii) 全国いくつかの大学に特殊な高エネルギー講座をあらかじめおいておく。
この講座は、大学院講座又は附属研究施設とするのがよいと考えられる。
大学その他の機関には、国立大学，国立大学工学系，公私立大学，国公立研究所，会社等がある。適宜考えなければならない。

§ 4 素研の建設期，定常時の試案



§ 5 その他

建設期と定常時の人の交流がうまくいくため、又 § 2 の長所が生かされ、欠点が生じないようにするには、建設→定常の素研の機構とそこに働く研究者や技術者の種別毎にこまかく考えていく必要がある。

掲 示 板

基 研 研 究 会 の お し ら せ

- | | |
|-------------------|-----------|
| (1) 二次相転移研究会 | 1月18, 19日 |
| (2) 不可逆過程の基礎理論研究会 | 1月21, 22日 |
| (3) 合同研究会 | 1月20日 |

場 所 京 大 基 研

(1) 二次相転移研究会は、昨年2回行われた研究会ならびに今夏堅田で行われた working group の討論を基礎にして、今回は特に次の二点にしばつた理論家の集りにしたいと思います。

(i) 二次相転移を特徴づける異常性の基礎論的な立場からの解明。

(ii) それに関連した dynamical な問題。

(2) 不可逆過程の基礎理論の方では、ここ数年間の成果のまとめと新しい問題の発展を目的として、次にあげられるようないくつかの問題にしばつて討論を行いたいと思います。

(i) European school を中心に進められた輸送方程式の理論は、何を明らかにしたか。

(ii) Green 関数法, diagrams 法等の最近発展した方法は、在来の統計力学の立場から、どう解釈されるか。

(iii) 緩和現象を記述する物理量が、異なる初期条件や time scales の下でどうきめられるか。

(3) 合同研究会では、両者の結節点の問題、例えば、協力現象を伴つた不可逆過程統計力学や不安定系の問題について討論したいと思います。

上記研究会に参加希望される方は、参加を希望される研究会名、講演を希望される方は講演題名を明記の上、12月20日迄に世話人（基研 西川恭治）宛お申し込み下さい。なお、予算が限られておりますので旅費の配分などは世話人に御一任いただきたく思います。

世話人 松原武生, 碓井恒丸, 高野文彦, 西川恭治, 田中基之

高速計算センターの利用について

既にご存知のように、東京大学に全国研究者の共同利用を建前として、大型計算機が設置されることになっております。(日本物理学会誌19(1964)202を参照) 設置すべき機種、共同利用の運営方式に関しては、日本学術会議からの推薦による委員を加えた、東京大学大型計算機設置準備委員会で慎重に検討してきました。

機種については、今年の2月以来慎重に調査検討してきた結果 日立 HITAC5020 3機で構成されるシステムを採用することに決定しました。この内の1機は1966年11月にHITAC5020Eに変更することになっております。HITAC5020およびHITAC5020Eの性能は次の通りです。

[日立の資料による。]

	HITAC 5020	HITAC 5020E
語 長 (ビット)	32	32
サイクルタイム (μs)	2.0	1.5
固定小数点加算 (μs)	8	1~2.25
固定小数点乗算 (μs)	42	4.25~7.75
浮動小数点乗算 (μs)	36~38	2.75~3.75

システムは6万5千語の記憶容量を持つ主機(1966年11月から5020Eになる予定)と8千語の容量を持つ衛星機とからなる主システムと3万2千語の容量を持つ機でつくられる副システムによつて構成されることになっております。

使用言語はHARPで、これはFORTRAN IV とほとんど同等なものです。計算センターの業務はおそくとも1966年1月に開始することになっております。

利用は、現在の各大学の計算センターを通じて申し込む方法、直接申し込む方法など現在検討中です。目下のところ、東京以外の利用者は主として航空貨物又は、航空郵便を利用していただくことになると思います。

掲示板

入出力は、カード、ラインプリンターを主とし、紙テープ、磁気テープの使用については目下検討中です。

なお、このセンターの利用者は全国の大学、研究所の研究者ということとなっておりますが、純粋な学術研究用の計算に限られております。

以上お知らせしたことだけではまだ不十分ですが、今後重要なことが決まり次第お知らせすることにしたいと思っております。なおこの計算センターに関する説明書ならびにニュースも、今後各地の計算センターなどに送られることになると思いますので、それをも合せて御覧下さる様お願いいたします。

東大 大型計算機設置準備委 小 野 周
" 有 馬 朗 人

名古屋大学理学部物理学教室スタッフの公募

名古屋大学理学部第二物理学科の設立に伴い、下記の通りスタッフを公募致します。希望者の応募、適任者の推薦をお願い致します。

1) ポスト：教授，助教授，講師，助手

人 員：各々若干名

2) 研究分野：理論，実験の別を問わず、また当教室既存の研究分野に限定
しません。

3) 提出書類

(イ) 応募の場合

○ 履歴書

○ 主要業績リスト（ほかにできれば主な論文の別刷）

○ 今後の研究計画書

(ロ) 推薦の場合

○ 推薦者

○ 略 歴

4) 公募締切：昭和40年1月15日（月曜日）

5) 着任時期：昭和40年4月を予定していますが、第二物理学科は昭和

4 1年に完成の予定ですので、その範囲で着任の時期を調整することは可能です。

- 6) 選考方法：名古屋大学物理学教室人事委員会で審査し、物理学教室会議で決定いたします。場合によつて任期がつくことがあります。なお、適任者が得られなかつた場合には、決定を保留することがあります。

7) 注意事項：

- (イ) 応募書類在中の旨を表記して郵送して下さい。
- (ロ) 助手，講師，助教授，教授のいずれの職を希望するかも書き添えて下さい。
- (ハ) 着任時期の希望もお書き下さい。

8) 宛 先： 名古屋市千種区不老町 名古屋大学理学部物理学教室

主任 坂田 昌一

なお、現在の名古屋大学物理学教室のスタッフ及び研究分野をお知りになりたい方は、当教室にお申し込み下さい。

1964年度決算報告

1964年度の決算報告がこの程まとまりましたので、報告します。

1964年度のまとめ（1963年10～1964年9月）

本会は「物性論研究」の引継金188,268円で本年度からスタートしましたが、初年度は43,925円の赤字で、144,343円の残高で次年度を迎えることになりました。

上述残高の中には56,030円の前受金が含まれておりますが、本年度の未収金が313,500円あり、前受金、未収金を相殺した名目上の残高は213,545となります。

多額の未収金がある理由は、大口の一括購読をしている大学が校費支払のため、納品後でないと誌代を払えないためです。

(四) 1964年度収支決算書 (1964.10～1964.9)

収 入 の 部

科 目	予 算 (円)	決 算 (円)	比較増減(△減)
「物性論研究」引継金	188,268	188,268 ^(a)	
会 員 会 費	451,500	436,045	△ 15,455
機 関 会 員 会 費	504,000	268,040	△ 235,960
印 刷 代		12,000	12,000
利 息	5,000	2,490	△ 2,510
合 計	1,148,768	906,843 ^(b)	△ 241,925

支 出 の 部

科 目	予 算 (円)	決 算 (円)	比較増減(△減)
印 刷 出 版 費	480,000	528,032	48,032
発 送 通 信 費	62,600	110,498	47,898
編 集 費	36,000	63,120	27,120
事 務 費	10,000	15,050	5,050
人 件 費	47,400	45,800	△ 1,600
合 計	636,000	762,500 ^(c)	126,500

次年度繰越金 = $b - c = 144,343$ 円

本年度損失金 = $b - c - a = 43,925$ 円

附 表

前受金・未収金の明細(1964.9.30現在)

	会 員円	機関会員円	合 計
前 受 金	37,620	18,410	56,030
未 収 金	18,100	295,400	313,500
差 引	19,520	-276,990	-257,470

(II) 物性研究の掲載内容

Vol.1~2 (1964年度)

掲載内容	頁 数	%
論 文	290	
講義ノート	192	
研究会報告	195	
ひろば	34	
資 料	43	
海外通信	19	
ニュースetc.	82	
合 計	855	
月平均頁数	71.25	

(IV) 購読内訳(1964.10.1現在)

発行部数 415 部

正 会 員	208
機関会員	167
外国会員	1
寄贈交換	1
在 庫	38

(V) 1冊の原価

	金 額円	%
直接出版費	528,032	
間接出版費	234,468	
年間発行部数	5,180	計100
月 平 均 発 行 部 数	432	
原 価	147.20	

残金21万円は未収金が完全に解消された場合であり現在31万余円が未収となっておりますので完納方御協力下さい。

編集部会計係

編集後記

- 来年度の基研長期研究計画の一つに「地球と物性物理」があげられているので、今回名大 清水氏に特に御投稿をいただいた。
- 東大 久保研の大学院の方々の御尽力により久保亮五氏の講義ノートを掲載することができました。
- 来月号（新年号）は北海道大学の編集になる特集号です御期待下さい。
- すでにお気付きの方も多いと思いますが、研究会報告は、役に立つものという主旨から、かなり無理なお願いをして充実したレポートにさせていただいております。各地で行われる研究会報告をどしどしお寄せ下さい。
- 決算報告をしました。公的機関の支払はおくれ勝ちですので、黒字倒産にならぬよう、とくそく方お願いします。

物 性 研 究 第 3 卷 第 3 号

1964年12月20日発行(定価300円)

発行人 碓 井 恒 丸

印刷者 倉 本 作 雄
京都市左京区岡崎徳成町11

発行所 物性研究刊行会
電話(77)8111 内線983
振替京都 5321
京都市左京区北白川追分町
京都大学湯川記念館内

編集後記

- 来年度の基研長期研究計画の一つに「地球と物性物理」があげられているので、今回名大 清水氏に特に御投稿をいただいた。
- 東大 久保研の大学院の方々の御尽力により久保亮五氏の講義ノートを掲載することができました。
- 来月号（新年号）は北海道大学の編集になる特集号です御期待下さい。
- すでにお気付きの方も多いと思いますが、研究会報告は、役に立つものという主旨から、かなり無理なお願いをして充実したレポートにさせていただいております。各地で行われる研究会報告をどしどしお寄せ下さい。
- 決算報告をしました。公的機関の支払はおくれ勝ちですので、黒字倒産にならぬよう、とくそく方お願いします。

物 性 研 究 第 3 卷 第 3 号

1964年12月20日発行(定価300円)

発行人 碓 井 恒 丸

印刷者 倉 本 作 雄
京都市左京区岡崎徳成町11

発行所 物性研究刊行会
電話(77)8111 内線983
振替京都 5321
京都市左京区北白川追分町
京都大学湯川記念館内

目 次

磁場中の Polaron の運動	波田野 彰	121
	中山正敏	
格子場内の一電子波動函数(II)	広田 徹	130
地球と物性物理	島津康男	143
講義ノート		
統計力学(I)	久保亮五	150
研究会報告		173
ニュース		179
プレプリント案内		179
会議報告		179
ひろば		181
掲示板		186
決算報告		190
編集後記		192

目 次

磁場中の Polaron の運動	波田野 彰	121
	中山正敏	
格子場内の一電子波動函数(II)	広田 徹	130
地球と物性物理	島津康男	143
講義ノート		
統計力学(I)	久保亮五	150
研究会報告		173
ニュース		179
プレプリント案内		179
会議報告		179
ひろば		181
掲示板		186
決算報告		190
編集後記		192